

1

次の世代に残していきたい資源(ヒト・モノ・コト)に焦点をあて、そのものの見方や関わり方を愉しみ、今の社会に新たな視点を取り入れてみる本テーマ。今回は、貴重な建築となったカトリック教会堂について自身の足をつけて調査を行う川島先生の論考を紹介する。

近現代・阪神間におけるカトリック教会堂の建築について

執筆: 建築史家・神戸情報大学院大学

川島 智生

京都工芸繊維大学大学院博士課程修了 博士(学術) 一級建築士 神戸市在住

近著に『近代日本の小学校建築史—鉄筋コンクリート造校舎の成立と展開』(中央公論美術出版 2024年)、『戦後モダニズムの学校建築』(鹿島出版会 2024年)、『近代神戸の小学校建築史』(関西学院大学出版会 2019年)、『宝塚温泉リゾートの建築史』(関西学院大学出版会 2022年)、などがある



問題意識

わが国のなかで郊外リゾートと住宅地の先進地域であった「阪神間」では多くの洋風建築が住宅を中心に建設されてきた歴史がある。大阪と神戸の間の阪神間は明治初期に国営鉄道が、明治後期には浜に沿って近世以前から集落を形成した町や村をつなげる阪神電鉄が、大正後期には何もなかった山側に阪急電鉄が、昭和初期には国道2号線に阪神電鉄国道線が敷設され、驚くほどに交通網が充実した地域となる。その結果、阪神間は大正後期から昭和戦前期に大阪や神戸の富裕層の住宅都市となり、神戸の外国人貿易商も居を構える。ここに豪華な洋館住宅や近代建築である公共施設がつけられてきたことはよく知られる。

だが、精神面、すなわち宗教にかかわる施設についてはどうだったのか。既存の集落には神社や寺院があったが、明治以降に新たな創設はなかった。仏教でいえば明治後期に西本願寺の大谷光瑞が岡本に二楽荘を建設していた。キリスト教ではミッションスクールが幾つも昭和戦前期に神戸市内から移転した。つまり、キャンパスの郊外移転である。ところが、肝心のキリスト教会についてはどうだったのか。信者の多くは元の居住地である大阪や神戸の教会に所属したために、新居住地ではすぐには必要とされなかった。しかし、明治後期から大正前期にかけての非日常の別宅から、昭和戦前期には定住する本宅へと移行するのに伴い、居住地の阪神間で教会が必要となる。また教会は景観の洋風化を推進する役割を担った。

阪神間ではキリスト教はカトリック、プロテスタント、聖公会の3つの宗派からなったが、ここではカトリックをとりあげる。その理由はカトリックが他の宗派と異なり、教会の建物自体にこだわる傾向が強く、「教会らしい」スタイルを示すことが多かった。いってみれば、プロテスタントでは教会を「集会所」と捉えるのに対して、カトリックでは「聖所」としていたことの反映である。そのため教会は簡素な箱の建物でよとするプロテスタントと異なり、カトリックではその建物の外観をゴシックやロマネスクなど西洋歴史様式を用いて壮麗なものとする傾向が1950年代までは続いた。内部空間も外観にしかりて、聖

なる場所にふさわしいものがめざされていた。

阪神間においては夙川カトリック教会(1932年)と芦屋カトリック教会(1956年)の2堂が現存する。筆者はすでに建て替えられたものを含め、広く資料渉猟をおこない、阪神間のキリスト教の教会堂の建築をさぐった。その結果、これまではまったく知られなかった尼崎カトリック教会(1932年)と六甲カトリック教会(1953年)で木骨モルタル塗りながらも、西洋歴史様式の聖堂が出現していたことが見出せた。一方で住吉カトリック教会(1936年)では西洋歴史様式のものではなかったが、戦前は和風スタイル、戦後は東畑謙三設計のモダンデザインのもので誕生していた。

時間軸の出発点は、大正10(1921)年10月1日にパリ外国宣教会のブスケ神父がはじめた夙川教会に端を発し、芦屋教会が完成する昭和31(1956)年までの35年間の阪神間のキリスト教会の様態を検証する。後に詳述するが、世界中のカトリックの聖堂建築を考える際に第二バチカン公会議(1962年から1965年の間)の以前と以降では内部空間のありように大きな違いが生じ、聖堂建築全体に大きな変容を強いるものであった。すなわち、ここでは以前のものを取り扱う。この時期に誕生した教会は阪神間モダニズムの成立と重なりあい、阪神間という地域形成と深く関連する。

ここではカトリック教会の成立経緯、平面計画、外観意匠(西洋歴史様式・和風・モダニズム)、建築構造(鉄筋コンクリート造か木骨か)、設計者の観点から、これら5つの教会堂の検証をおこなう試みである。先行する研究は管見の限りにおいてない。ここでいう阪神間とは現在の芦屋市・神戸市東灘区・西宮市にくわえて、尼崎市も範囲に入れて考えている。

なおこの研究は神戸市東灘区のJR住吉駅前のウィッシュで筆者が定期的におこなっている、「阪神間の建築歴史講座」第12回目(2025年12月6日)の「建築史からみる阪神間カトリック教会」で公開されたものであり、その内容を論考としたものである。

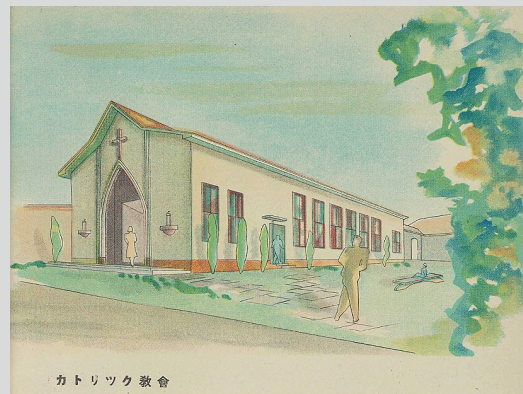
1. 昭和前期の カトリック教会の建築動静

日本におけるカトリック教会の歴史をみると、明治初期には積極的な進出をみせたカトリック教会はその後、プロテスタント教会にくらべて、その動きは緩慢となる。が、昭和に入ると一転して、勢いを強め、都市部に教会を設ける。敗戦後の昭和20年代にそのことはより加速され、全国各地の中小都市にも次々と設置され、その数は激増する。戦後の設置は欧米の宣教会や修道会が敗戦後の生活苦にあえぐ日本に一举に進出する構図がみえる。その流れは昭和35(1960)年頃まで続く。国民教化によってカトリック教の国がめざされる。そのことに関連して、昭和25(1950)年にカトリック教会の聖堂のモデルを示す建築図集が刊行されていた。『建築設計図範例全集』第4巻であり、バシリカ形式の教会が例示される。さてここに示すのは、この時期に建設された聖堂として、もっとも完成度の高い園部カトリック教会である。木骨モルタル塗であり、昭和28(1953)年にウィリアム・ニーリというメリノール会の神父によって設計され、完成する。ニーリは宣教師建築家であり、京都を中心に多くのカトリック聖堂の設計をおこなった。残念なことにこの聖堂は廃堂となり、取壊が予定されている。

阪神間のカトリック教会は大阪教区に含まれ、大阪は長崎・東京とならびカトリックの三大拠点であった。大阪教区が昭和41(1966)年に刊行した『宣教100年』には教区内の全教会の概要が記される。同書から、阪神間の教会に関するものを拾ってみると、戦前期までは夙川、尼崎、

住吉の3教会にすぎなかったが、昭和20(1945)年以降は芦屋(1945)、伊丹(1948)、灘(1951)、園田(1951)、仁川(1952)、三田(1952)、六甲(1953)、武庫之荘(1955)、甲子園(1962)、宝塚(1965)と、数多くの教会が設置される。

現在阪神間にあるカトリック教会の多くは昭和20年代に創設され、昭和30年代に聖堂を建設したものが多く。すなわち、阪神間でのカトリック教会の多くは戦後に成立したものである。長崎をはじめとする開港都市や東京・京都・大阪の三大都市とは異なり、明治期のものはない。その理由は前述のとおり、阪神間とは別荘地で出発しており、ようやく大正後期になって開けてきたことが関係する。すなわち、阪神間モダニズムの成立がはじめて生まれてきたものといえる。小林聖心女学院を嚆矢としてはじまった阪神間におけるミッションスクールの誕生や移転もこの流れと軌を一とする。



完成予想図・カトリック教会(『建築設計図範例全集』第4巻)

さて前述の第二バチカン公会議によって、最重要儀式である典礼が改められ、教会建築のありようが大きく刷新され、コベルニクスの転回を示す。それまでは司祭は会衆に背中をみせてミサをおこなっていたが、司祭が会衆側を向いてミサをおこなうようになる。その結果、これまでの祭壇を最奥部に置く縦長のバシリカ形式ではなく、祭壇を中心とした円形や正方形のプランとなる。外観についてもモダニズムにとどまらず、抽象表現主義など現代建築につながるスタイルが出現する。これまでの規範はなくなり、より自由な形となる。その影響は日本の教会建築にもたちまち波及し、それまでのものと大きな断絶が生じる。そのため西洋歴史様式の模倣はほぼ消えることとなる。



園部カトリック教会・外観(川島智生撮影)

このような動きは先行して1950年代後半から生まれており、わが国では木造建築禁止令を受けて拍車がかかった鉄筋コンクリート造の時期と重なったことで、いち早くこの影響を受けた新しい聖堂が現れる。1964年には丹下健三設計の東京カテドラル、同年にレーモンド設計の名古屋の神言神学院聖堂、1965年にジョージ・中島設計の京都桂教会、1966年にレーモンド設計の新潟新発田教会などが挙げられる。すなわち、第二バチカン公会議が現代のカトリック教会の建築形を方向付けた。結果として以前と以降ではプランや形に断絶にも近い差異が生じることとなる。それまでの設計は外国人の宣教師建築家もしくは雛形によったが、以降は日本人の著名な建築家によって多様なものが生まれる。

2. 夙川カトリック教会

1) 歴史

夙川カトリック教会は昭和7(1932)年4月に竣工する。同教会は大正10(1921)年、阪神間最初のカトリック教会として、フランス生まれのS・ブスケ神父が西宮の札場筋と旧国道との交差点の借家に「聖なるロザリオの教会」を設立し発足する。関西最大規模のカトリック教会堂は大坂カテドラルであるが、その次に位置する規模を誇り、関西のカトリック教会としては最初の鉄筋コンクリート造教会堂であった。1945年から1963年までは大阪教区の臨時司教座聖堂としての役割を果たした。1995年



夙川カトリック教会・外観(川島智生撮影)

の阪神大震災では躯体に関しては致命的なダメージは受けなかったが、パイプオルガンを失う。また天井板の破損などの被害があった。

2) 建築特徴

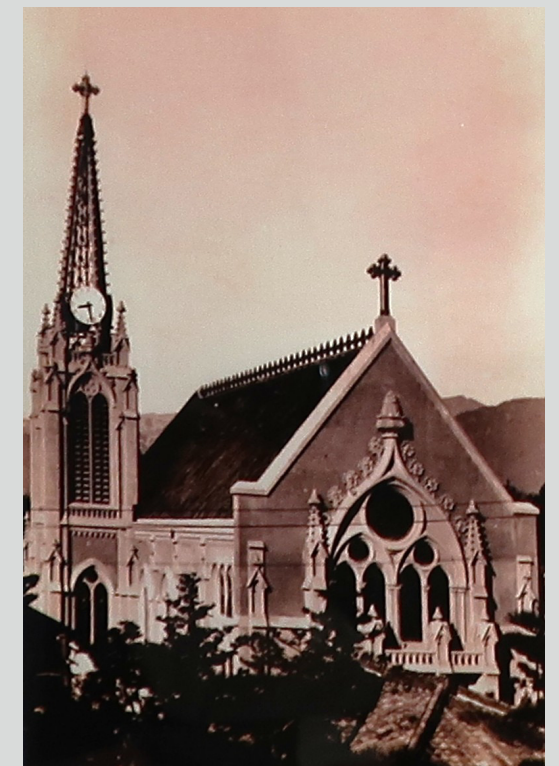
「大阪教区におけるもっとも美しい聖堂」と捉えられたこの教会の建築特徴をみる。まずバシリカ式の平面構成

を持ち、躯体は鉄骨鉄筋コンクリート造構造で、小屋組は鉄骨ラチス梁からなる。正面向かって左側後方に高さ33mの鐘楼が建ちあがる。すなわち祭壇の脇に鐘楼が設けられる。工事中の写真からはアングルとフラットバーを組み合わせて構成するラチス柱になっていたことがわかる。当時はH形鋼がないため、梁も柱と同様であった。

建物の大きさをみると、桁行121尺(36.3m)で、柱は15尺(4.5m)ピッチとなる。梁間は両側の側廊が12尺(3.6m)、中央の身廊が18尺(5.4m)、全体で42尺(12.6m)、祭壇廻りのみ梁間66尺(19.8m)となる。阪神間のカトリック聖堂ではもっとも大規模となる。

外観の特徴は正面にゴシック的な装飾が設けられている点にある。その構図はオージーアーチの枠のなか、二つのランセット(尖りアーチ)と1つのオクルス(丸い開口部)からなるプレート・トレサリーが構成される。二つのランセットはさらに細分化されて、おのおのがプレート・トレサリーを示す。イギリスのゴシックスタイルの教会にしばしみられる意匠となる。側面では柱型が外壁面に突出し、垂直方向を強調し、その柱頭は三角形の切妻形となる。

夙川カトリック教会・竣工時外観



柱と柱の間にはプレート・トレサリーが付き、採光換気がなされる。このようなファサードの様態はゴシック・リバイバル、あるいはネオ・ゴシック様式とよばれる由縁となる。

計画段階の図面が残っており、現在の建物とは幾つかの点で異なる。一番大きな違いは鐘楼の位置であり、現在とは逆の位置にあった。意匠としては鐘楼の中間階の形が異なる。

3) 設計者 梅木省三

設計者は梅木省三というデザイナーが担っていたことは夙川教会の内部資料であきらかになっている。梅木はこれまで建築家としてはまったく知られていない。なぜなら本業が図案家であったからだ。梅木がどのような経歴を有し、どのような建物をデザインしていたかは、今回の筆者の調査ではじめてあきらかになった。



以下に経歴を記す。出典は大正15(1926)年刊行の『蔵前校友誌』である。明治21(1888)年5月島根県福浦村(現・太田市)に生まれ、県立浜田中学校を明治39(1906)年に卒業後上京し、明治43(1910)年官立東京高等工業学校図案科を卒業する。在学中より、日本橋区橋町の丸見屋商店に勤務し、卒業後は同商店に就職する。小間物化粧品問屋であり、化粧品の意匠を手がけていたのだろう。一方で太平洋美術会洋画研究所に入り、洋画の勉強に打ち込む。

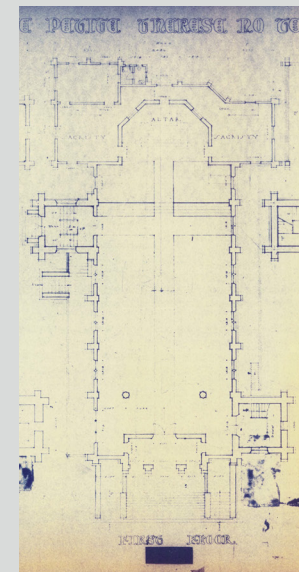
卒業後の明治44(1911)年4月には大阪に出でて梅木図案所を主宰する。23歳の時である。大阪では高等教育を受けた技術者による最初のデザイン事務所であった。26歳になった大正3(1914)年には室内装飾や家具設計にとどまらず、建築設計や請負に手を出す。この頃施主は満鉄・関東庁であり、九州工業博覧会満蒙館を手がけた。大阪府立商品陳列所の装飾もデザインしていた。大正15(1926)年の時点で、大阪市東区谷町3丁目常磐町通りで梅木図案所を主宰する。

昭和5(1930)年の公教雑誌『声CATHOLICA』(カトリック中央出版部発行)によれば西宮に在住とある。この時点で夙川カトリック教会の信者になっており、ブスケ神父より設計依頼を受けたものと考えられる。梅木はブスケ神父の指導のもとで設計をおこなったのだろう。同時期に梅木は格式高い書院造和風スタイルの奈良カトリック教会(昭和7年12月25日に竣工)を設計していた。ゴシックスタイルとの差異は大きい、なぜ可能だったのかといえば、デザイナーだったからだとおもわれる。図案家らしく、洋風、和風ともに自由に設計ができたようだ。後にみる和風の住吉教会や洋風の尼崎教会の設計者はいずれもが不詳であり、このことから梅木が設計した可能性もある。

ここでいう設計とはあくまでも外観や内部意匠を対象としたことで、構造設計者は別にいたことは間違いない。夙川カトリック教会は鉄筋コンクリート造や鉄骨があり、大工らだけではできないもので、高等教育を受けた構造専門家が介在したものと判断できる。

夙川カトリック教会・竣工時内部

4) シルベン・ブスケ神父



夙川カトリック教会・1階平面図

この教会をつくりあげたシルベン・ブスケ神父の履歴を教会との関係から辿る。ブスケ神父はパリ外国宣教会のフランス人カトリック司祭で、南仏のアヴェロン県で1877年11月19日に生まれ、1943年3月10日に亡くなっている。明治34(1901)年来日し、明治39(1906)年大阪で北野教会をつくる。大正10(1921)年カトリック夙川教会を

設立する。その前年に阪急神戸線が開通し、夙川駅が設置されていた。神父は女子修道院の構想も立てたが、未完におわった。ブスケ神父は他のキリスト者とは違って戦中も帰国せずに日本にとどまり続けた。そのため、憲兵らに拷問され亡くなることとなる。

その事情は「ブスケ師を偲ぶ」(『声CATHOLICA』861号、1949)に詳しいが、ブスケ神父を捕らえるために、青年信者を擬装した「憲兵隊のまわし者」がブスケ神父の言質を一年がかりであつめ、それを根拠に大阪憲兵隊は昭和18(1943)年2月16日の早朝、教会に押し入り逮捕し、拷問にかかる。神父は信頼していた青年の裏切りのために発狂したともいわれている。飼犬に手を噛まれた訳だ。翌3月10日にこの世を去った。遺体には拷問の跡があったという。五年後の昭和23(1948)年に信徒たちが神父の墓を掘り起こし、この殉教者の遺体を夙川教会に安置した。亡骸は満池谷墓地のキリスト教区に葬られた。

5) 遠藤周作の出発点

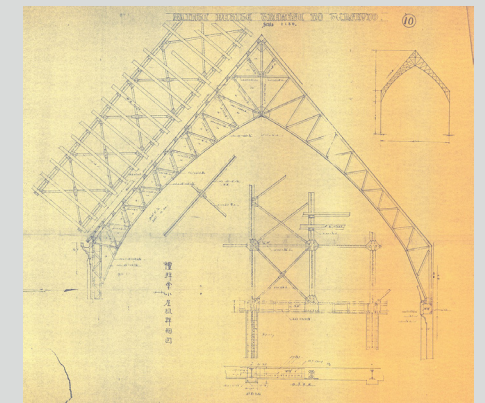
この教会は小説家遠藤周作が11歳の時に洗礼を受けた教会である。昭和9(1934)年のことで、建設されて2年

目のことであつた。遠藤の精神面での出発点はこの教会にある。そのことを遠藤は次のように記す。



夙川カトリック教会・鉄骨建て方

「少年時代の私の心の風景はほとんどこの夙川の天主公教会に結びついている。少しうすよごれたクリーム色の建物。庭や門のそばにあった夾竹桃の花。司祭館のバターの匂い。(中略) 駅から右に向かう坂道をしばらく登ると、家々の屋根の向こうに教会の塔と十字架が見える。むかしはそれはクリーム色の塔で金色の十字架だった。門には天主公教会という立て札がはめこんであり、扉にそって夾竹桃の木が植えられていた」(『夙川の教会』『すばる』1974年9月号)



夙川カトリック教会・小屋組断面図

梅木省三(『蔵前校友』1926)



3. カトリック住吉教会

1) 歴史

最初にその写真をみたとき、少し違和感を感じたことをおぼえている。ただそれまでに全国各地の和風スタイルのキリスト教の教会堂を廻り、その意味を考えつつあった筆者にとって、知る限りにおいて豪華さからはもっとも遠い位置にある、きわめて簡素なスタイルであった。そこには一見ふつうの家屋のスタイルがめざされた意思がみえる。ここにこの聖堂の価値がある。最初の聖堂のことである。

住吉天主公会の歴史をみていく。「落成記念写真帖」によれば、昭和10(1935)年5月阪神御影駅近くの御影町申御田で一軒家を借りて、仮聖堂が設置される。翌昭和11(1936)年に近隣の住吉村の字丸ノ後の現在地が購入され、8月1日に上棟式があり、12月13日に竣工し、献堂式が挙行される。この時、信者数は130名であった。

昭和35(1960)年刊行の「創立二十五周年記念アルバム」によれば、この地を次のような受難が数年おきにおこったことが記される。まず昭和13(1938)年の阪神大水害(住吉川の洪水による)があり、教会も被災する。最大の悲劇は昭和20(1945)年8月6日の空襲により聖堂が焼失したことだ。この時にデーラー神父の決死の奮闘によって、司祭館と伝道館は類焼を免れた。多くのキリスト教会の西洋人神父は帰国を余儀なくされたが、この教会では外国人神父は戦時中もその地位にとどまっていたことは注目に値する。

昭和28(1953)年の台風では仮設の聖堂の屋根が飛ばされる。その復興として、昭和31(1956)年12月に新しい新聖堂が献堂される。この時点で、司祭館、伝道師宅、幼稚園、ルルドの洞窟がつくられており、教会として整った形態を示した。昭和35年には信者は655人となる。この聖堂は1995年の震災にも耐えたが、老朽化で2004年に解体され、現在の新しい聖堂が鉄筋コンクリート造で建設される。

2) 1936年日本式聖堂

1 残された写真と図面

「聖堂は日本式建築で北側に廊下を有する、約百畳敷の畳座敷に腰かけを置いたものだった」(「創立二十五周年記念アルバム」)と述べられる。聖堂内部の写真が一葉残されており、ここからは正面が祭壇だが、床の間のようにもみえる造りとなる。中央には武士姿の聖ポーロ三木が描かれた絵があり、その両側に額縁のような柱が添えられ、さらにその両側に丸柱が建つ。その外側に奥の控室に通ずる扉がある。祭壇内部の壁面は垂直線を強調する白木の柱によって特徴付けられる。天井は格天井となる。すなわち、内部は書院造りに通ずるスタイルになっていた。

続く会衆室では祭壇から連続した室内の側壁柱に丸柱が用いられる。欄間の意匠は吹寄せの簡素な組子からなり、照明器具もそれに合わせたシンプルなものとなる。だがいずれにせよ、意識的にデザインされており、和風スタイルを標榜しながらも、聖堂にふさわしく、厳格な左右対称性が示されていた。ここからはキリスト教の聖堂らしさはうかがえない。むしろ神社の幣殿を想起させるかのようである。

図面は平面図が一葉残されており、そこには東西軸にバシリカ風の長方形平面が示される。そのプランをみると、東から西に向いて、便所、玄関ホール、礼拝堂、控室と4室が連なる。礼拝堂は入口から16帖、24帖、24帖、祭壇と4分割できる。畳間はそれぞれ襖で仕切れるようになっていた。柱の間隔は各室単位で



最初の住吉カトリック教会・内部

異なり、6尺(1.818m)ピッチが多いが、4尺(1.212m)ピッチや3尺(0.9m)ピッチの箇所もある。梁間は30尺(9.09m)、桁行は84尺(25.5m)となる。

2 簡素な和風意匠と神父の意向

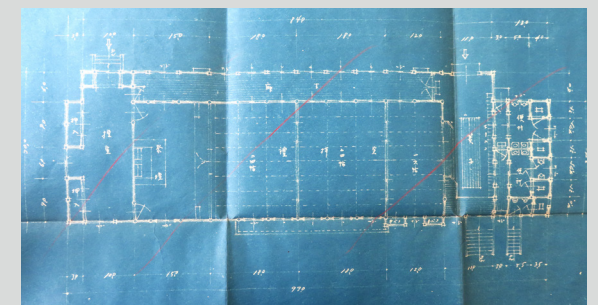
外観をみる。左右にある玄関ポルティコと中央にある切妻の軒破風によって、一見左右対称のファサードが示される。凝視すると、シンメトリーは微妙に崩され、正面の切妻破風が少し左にずれている。内部のプランは正面の切妻破風とはなんら関係しないことから、敢えて意図的に左右対称にならないようにずらしたものと判断できる。非対称性は日本建築の特質のひとつである。

ここに記した写真は北側の外観であり、そのなか、2つの玄関ポルティコのうち、右側の控室側は神父の出入口、左側は信者側の玄関となる。全体は切妻屋根となり、外壁は柱と貫をみせる真壁造となるが、中央部にはガラス障子が7つ連なり、連続するうつくしさをみせる。

後に詳述する一般の和風のキリスト教会堂が書院造りを基調とすることが多いなかで、この玄関構えは数寄屋造につながる簡素な意匠をみせる。初見の時はふつうの家の延長線上にみえたが、以上分析してきたように、意識的なデザインがほどこされており、デザイナーが設計に関わっていたことがうかがえる。設計者は不明だが、このようにファサードを手際よくまとめる手法からは前述の梅木省三の可能性も考えられる。

一方で同時に建設された司祭館はモルタル塗りの木骨洋館となる。ここから考えられるのは、神父が生活する家

最初の住吉カトリック教会・平面図



最初の住吉カトリック教会・北側の外観

は洋風だが、日本人信者のための聖堂は一見キリスト教会堂にはみえない和風スタイルが採用されていたことだ。たしかにこの時期には洋風的なものを排除し、天皇中心主義を掲げる国体明徴運動が開始され、国粋色が一挙に強まり、右傾化が加速していた背景がある。そのような意味では巧みな偽装とみることもできる。だが、おそらくは建設を担った神父の考えが影響しているのだろう。翌昭和12年に尼崎カトリック教会が建設されるが、木骨モルタル塗ながらも、西洋歴史様式の聖堂であった。このことからカトリック教区はなかに一定の方針があったのではなく、個々の教会にゆだねられていたことがわかる。

3 和風スタイルの教会堂の系譜

和風スタイルのキリスト教聖堂について概観する。宗派でいえば、カトリックと日本聖公会の2派のみである。その出発点は管見の限りでは大正13(1924)年の熊本降臨教会がある。同教会はハンセン病患者のための回春病院の敷地内にあり、入母屋屋根に懸魚が付く。裳階が入り三重の軒をみせる。日本聖公会が設置した。現在は建て替えられている。

現存する最古のものはやはり日本聖公会の奈良基督教会である。昭和5(1930)年に建設され、2010年に国の重要文化財となる。聖公会の信者にして、宮大工であった大木吉太郎の設計である。大木は田原本聖救主教会(1933.現存)、桃山基督教会(1936.現存)などをつくった。奈良基督教会に続くのは彦根聖愛教会(1931.現存。スミス念堂)、上田聖ミカエル及諸天使教会(1932.現存)がある。共に聖公会系となる。

奈良カトリック教会・昭和7年



昭和7(1932)年にはカトリックでは最初の和風意匠の聖堂が誕生する。前述の奈良カトリック教会で、梅木省三の設計であった。和風になったのは奈良基督教会と同様に奈良公園に近接し、その風致に合わせるために格式高い和風スタイルが求められたためであった。以降カトリックでは和風スタイルの聖堂が各地で建設される。住吉カトリック教会の後に、昭和13(1938)年に広島修道院、昭和14(1939)年に豊中カトリック教会、同年大津カトリック教会、同年カトリック片瀬教会が出来た。いずれもが書院造りを採用し、現存する。

戦後は和風スタイルの教会は一切建設されることはなかった。カトリックと日本聖公会による1930年代に出現した10の教会と1つの修道院は国粋の状況にすり寄ったというよりも、その土地の風土ならびに土着建築に違和感のないように出現したものであったと捉えることができる。

3) 1956年2代聖堂

1 モダンデザインの聖堂

正面が撮られたこの一葉の写真に驚かされた。全面が暗色の壁に対照的に白色のオイルペイント塗りの建具(玄関の両開きの扉、その額縁、左右の縦格子の腰窓)がこのファサードを引き締める。正面には四本の独立柱が玄関ポーチを支える。軒は化粧垂木がデンティル(歯飾り)風に配され、軒裏は白く塗られる。壁はモルタル塗りの上に彩色がなされた。屋根の存在は隠されているが、亜鉛鉄板葺きとなる。現在でもけっして古めいた感じはない、モダンで斬新なデザインといえる。

竣工時の側面の写真は見出せていないが、1995年の震災時に撮影されたものが一葉ある。昭和40(1965)年に増築された後のものだが、そこでは柱型が確認される。外壁の色は白色である。当初からのものなのかは定かではない。より具体的な形については設計図のなかの立面図にみることができる。そこから判明する特徴は3点あり、1点目は祭壇側にむかって緩やかな勾配で高くなっていく片流れ屋根、2点目は祭壇の側壁の瓢箪型の窓、3



東畑謙三設計の住吉カトリック教会・外観

点目は壁面を区切る7本の付柱、にある。

1点目は祭壇に近づくにつれて天井が徐々に高くなる高さの様態が外観に反映されたもので、くわえて屋根の存在を希薄化することも考えられていたと推測される。屋根の勾配は1/10の緩やかなものであった。東畑謙三の娘、鈴木素子の述懐によると、「祭壇に向けて天井が波打ちながら次第に高くなり、両側の柱と壁で区切りをつけることで空間をリズムカルにしようと思ったようです」(「ペロー神父様を訪ねて」『住吉』163号.2004)とある。

2点目は和風意匠の引用であり、2年前の昭和29(1954)年に村野藤吾が広島の世界平和記念聖堂で用いていたものの影響がみられる。3点目は12尺(3.646m)ピッチで区切る付柱で、長大な桁行方向の側壁が単調になることを防ぐとともに、聖堂らしく垂直線を強調した。

設計図には外観透視図が描かれており、実際には別棟でしかも鉄塔として建設された鐘楼が聖堂の北側に接続して建設されることとなっていた。3階建てとなり、おそらくはこの部分だけが鉄筋コンクリート造で計画されていたようだ。

昭和31(1956)年の時点のわが国キリスト教の聖堂のなかで、これほど新しい試みがなされた建築があったのだろうか。きわめてローコストの木造建築であったが、今

後の教会の行方を暗示したものであったようにおもえる。だが、その数年後には第二バチカン会議により、カトリックの聖堂のありようは大きく変化し、この教会建築が提示したものの影は薄くなってしまった。建設されて七十年が過ぎ、歴史的に振り返ると、小規模なバシリカ式聖堂という点ではモダニズムの極北の建築のひとつと位置付けることができよう。

2 設計経緯と東畑謙三の理念

武田五一の弟子にして、大阪を代表する建築家、東畑謙三みずからが設計したと伝えられている2代目の聖堂の建設は、仮聖堂が台風で使えなくなったことを事由とした。すなわち、その新築費に困り、ただちに住吉教会内に復興委員会が組織されて基金を集め、ローマ聖庁とフランスからの寄附をくわえて、400万円の工費に充てられた。設計は無償で建築家東畑謙三が担う。設計依頼は昭和31(1956)年3月で、計4葉の設計図の作成は8月1日になされ、起工し、その年の12月に完成する。鈴木素子が住吉教会の熱心な信者であって、その縁で引き受けることになった。鈴木素子は後に東畑建築設計事務所の常務取締役を務める鈴木洋也と、ここで結婚式を開いた。東畑謙三は設計依頼の経緯を次のように記す。

『たしか三月末であったがペロー神父様と深山腰高両氏がわざわざ御みえになり今回皆々様の御寄進によって住吉教会を建てる事になったのでその設計をせよとの事。実は娘が信者ではあるが私は信者ではないので一時はその任ではないと辞退しましたが、ペロー神父様の話の聞いている中にこれはいけると思った。フランスの新しい教会の様子、ことに専門家でなければ到底知らない様なフランスの新しい建物の名前や、世界的に有名な建築家の名前等、私は専門知識をえぐられた様な気がしてドキッとした。数回の相談の結果設計図が出来上がったのであるが、私は何のおごとも聞かなかった。こ

うなると妙なもので返って責任の重大なのを感じるものである。信者の清純な気持を想ふ時、どうして虚飾の多い設計が出来ようか。又日本に古い歴史を持つカトリックが今日どうして外国のまねをした建物で満足出来るようか。」「(「住吉教会の設計にあたって」住吉教会蔵)

この東畑謙三の言説には設計に関する2つの要点が示されている。1点目は依頼者ペロー神父が伝えた「新しい教会」に対する親近感への触発で、おそらくは前年の昭和30(1955)年に完成したル・コルビュジェのロンシャンの礼拝堂(フランスにあり、世界遺産)のことが話題になったのだろう。2点目は「虚飾の多い設計が出来ようか」と「外国のまねをした建物で満足出来るようか」という点であり、戦前期までのような装飾豊かな聖堂ではなく、シンプルなモダニズムの建築につながった。

ここで生まれたデザインは、「創立二十五周年記念アルバム」によれば、「新聖堂は日本でも初めての、まったく新しいキュービズムに素朴な日本調を加味した様式を採用し、(中略)従来他の聖堂に見られる様な複雑な装飾をまったく捨てて、簡素にし、入る者の心を純粋に無間と信心の世界に引き入れる様にしている」とある。この聖堂に関して、しばし用いられた「フランス・キュービズム」という呼称がどのような建築デザインを表すのかは定かではないが、一般的なキュービズム建築とはチェコで1910年代に流行した建築スタイルで、幾何学的な形、なかでも斜線・斜面・結晶形で構成されたという特徴を有した。この意匠は1920年代のアルデコにつながっていく。

住吉カトリック教会の側面・震災直後



前述の東畑謙三の建築理念には2つの特徴が挙げられる。1点目は「日本調を加味した様式」であり、実際にこの聖堂のなかで次のように反映される。正面ではポーチ屋根を受ける化粧垂木、側面では祭壇の高窓にあった瓢箪形の嵌め殺し窓である。この高窓は両側壁についており、この形は東畑謙三の提案であった。2点目は無装飾の意匠をめざした点にあり、祭壇はいたってシンプルな形となり、壁によってのみ構成される。その壁はベニヤ板の練り付けとなる。ここからは装飾が排されたモダニズムの空間になっていたことが判明する。

設計図には室内透視図があり、天井の曲線がここではS字カーブとして表現されていた。また身廊と側廊を区切る丸柱の上部には壁が垂れ壁となって下がるなど、工事のさなかで設計変更があったことがわかる。木造建築の特性である、かるやかな空間が設計時には提示されていた。

3 聖堂の平面

この聖堂の大きさは約65坪あり、梁間は30尺(9.09m)、桁行は玄関ポーチを入ると、78尺(23.6m)となる。最初の聖堂と梁間は同じだが、桁行は若干短い。ポーチから祭壇に向かって、ポーチ、玄関、会衆席、祭壇、聖具入れと連なる。身廊と側廊を分けるように両脇には丸柱が12尺(3.6m)ピッチで入る。柱の位置する上部梁間方向には傾斜する天井から7寸(21.2cm)ほど下り垂壁が付く。断面形状は祭壇側が斜線で、玄関側は四分の一円となる。なんらかの音響効果が考えられたのだろう。祭壇に向かって屋根は十分の一の勾配で高くなり、天井高さも同勾配で高くなる。聖堂全体の桁行は78尺(23.6m)あるので、祭壇上の屋根先端では玄関ポーチの軒高よりも2.36m高くなり、最高高さは7.21mとなる。

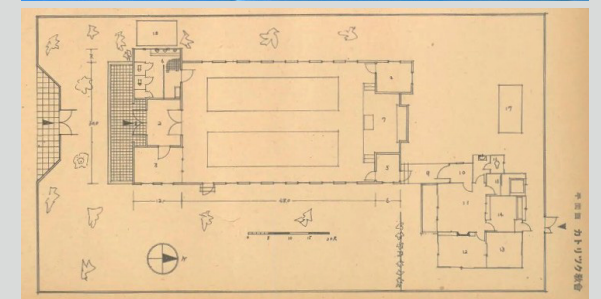
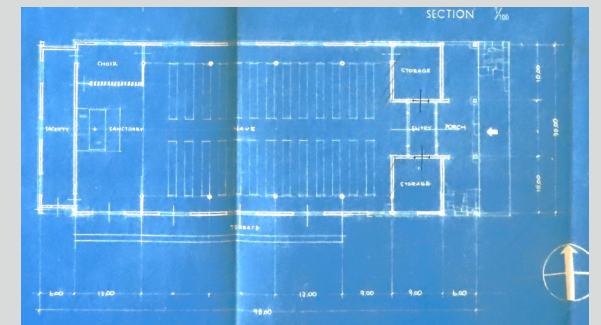
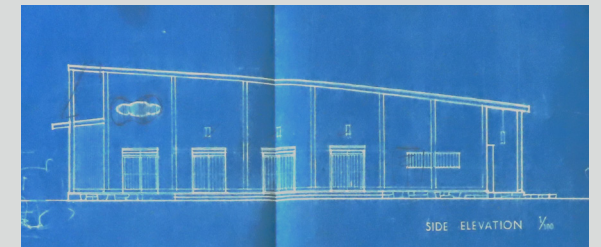
さて、このような平面計画はどのように位置付けられるのか。この聖堂が建設される6年前の昭和25(1950)年に刊行された『建築設計図範例全集』第4巻(建築美術研究所)のなかに、昭和20年代の一般的なカトリック教会が平面図と外観透視

図で紹介される。この図版集にはプロテスタントや聖公会の教会だけではなく、社寺の紹介もない。あるのはカトリック教会だけである。ここからはこの時期の日本では、いかにカトリック教会の新築が多かったかがうかがえる。

同書の理想とするカトリック聖堂の平面図をみると、桁行66尺(20.0m)、梁間30尺(9.09m)となる。住吉教会の桁行はポーチと聖具入れを除けると、66尺となり、梁間は30尺ゆえに、ほぼ同値となる。すなわち、聖堂はこの大きさが一般的で、標準形をなしていたものと推測される。



住吉カトリック教会・東畑謙三による透視図(上は外観、下は内部)



写真上から順に:
住吉カトリック教会・東畑謙三による設計図・立面図、
東畑謙三設計の住吉カトリック教会・内部、
住吉カトリック教会・東畑謙三による設計図・平面図、
カトリック教会・平面図(『建築設計図範例全集』第4巻)

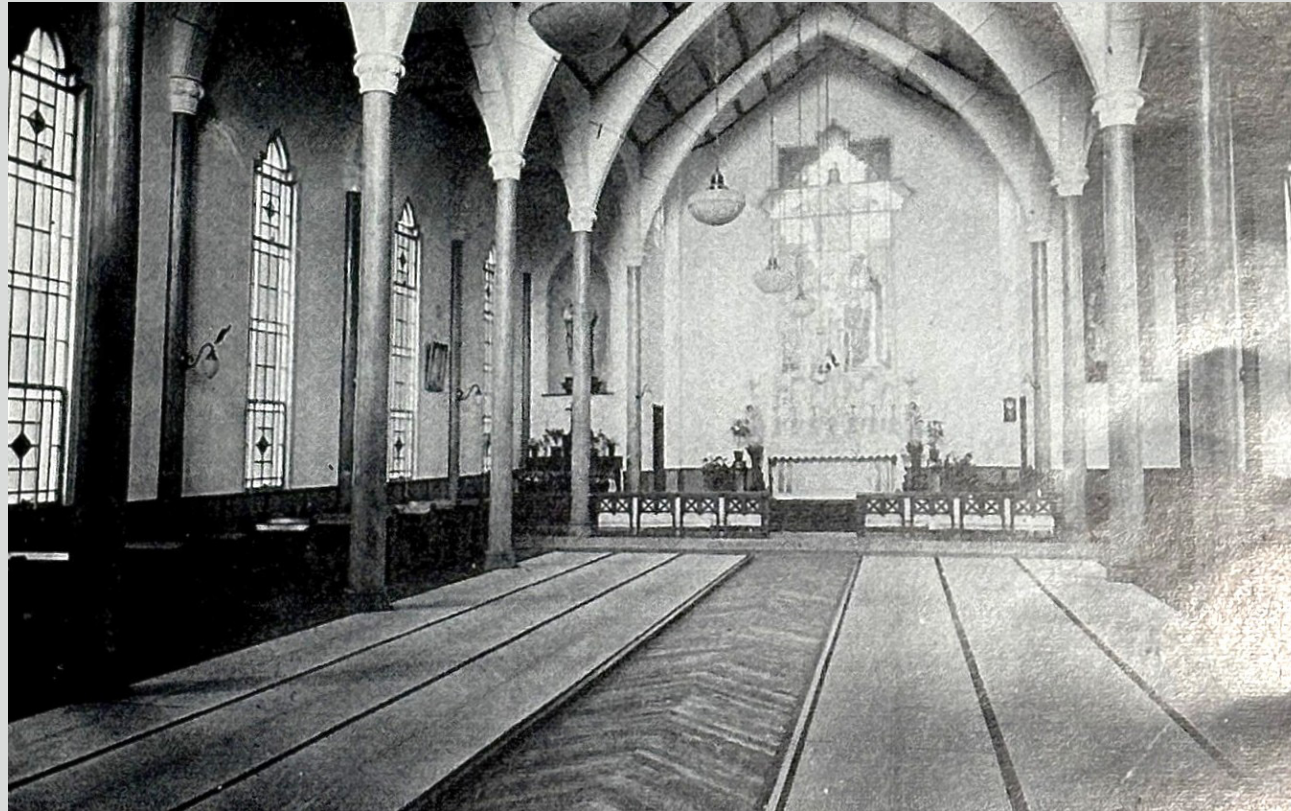
4. カトリック尼崎教会

大阪と夙川カトリック教会の間の尼崎市にできたのが尼崎教会である。夙川カトリック教会より信徒50人が移籍して、昭和2(1927)年にスタートし、信徒数が700人を超えたためにこれまでの仮聖堂では狭隘となり、昭和10(1935)年に尼崎市の中央部の難波通りに1400坪の土地を購入し、昭和12(1937)年11月に尼崎天主堂を完成させる。洋風の聖堂であったが、空襲で焼失したことを考えれば、木骨モルタル塗りの建物であったものと判断できる。戦後もほぼ同位置に切妻破風の木造モルタル塗りの聖堂を復興させる。現在は鉄筋コンクリート造に建て替えられている。

平面をみると、バシリカ式の聖堂に少し距離をとって鐘楼が独立建築で建つ。鐘楼は戦災で焼失を逃れており、鉄筋コンクリート造であったものとみられる。切妻破風の聖堂の建築スタイルは祭壇側を道路にみせ、中央の身廊は畳敷きとなる。祭壇の奥には採光用の開口部が十字形であけられており、キリストが描かれたステンドグラスが填まるが、その構成は幾何学的な鉛ケイムの割付からなり、構成主義を彷彿させる意匠となる。内部は柱がならび、天井は三角形の屋根形をあらわしてみせる形式となる。記念誌によれば、会堂の広さは114坪であった。



尼崎カトリック教会・外観



尼崎カトリック教会・内部

災にも耐え現存する。設計は当時、日建設計工務の顧問であった長谷部鋭吉が担った。長谷部は宝塚に在住のカトリックの信者であって、七年後の昭和38(1963)年に大阪カテドラル聖マリア大聖堂を設計した。

芦屋教会は芦屋市平田町の稲畑二郎邸(現存)を仮聖堂として昭和20(1945)年秋に発足し、昭和22(1947)年に現在地を芦屋市から譲渡される。この時期カトリック教会やカトリック系学校はGHQの斡旋で土地の提供を受けることが多かった。芦屋教会への譲渡の経緯は定かではないが、カトリック教会設置を重視する占領政策の中でなされたものとみることができる。昭和25(1950)年秋に六甲山の別荘を移築し、仮聖堂兼司祭館とするが、信徒数が増え、新しい聖堂建設に至るといふ前史があった。

この聖堂は芦屋川の堤防、すなわち傾斜地に建つために、川側の道レベルでは3階建て、土手上の道では2階建ての構成となる。玄関は川に面してあり、大階段をのぼって1階玄関にアプローチする動線となる。鉄筋コンクリート造

5. カトリック芦屋教会

芦屋川右岸(東側)沿いに立つのはカトリック芦屋教会であり、昭和30(1955)年10月に起工し、昭和31(1956)年12月に献堂される。同年に前記の住吉教会は木造で建設されたが、こちらは鉄筋コンクリート造でつくられ、震

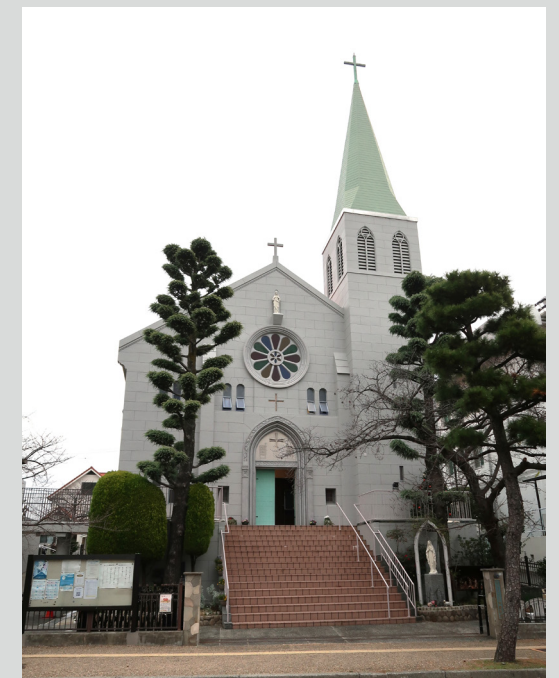
この聖堂は塔や薔薇窓といったゴシック的な骨格を示しつつ、装飾は少なく、むしろ重厚感のあるロマネスク的な印象をみせる。設計に関して長谷部にはすでに存在した夙川教会を意識せざるを得なかったものと推察できる。そのために装飾的なゴシックではないものをつくろうとしたのだろう。夙川教会完成後24年間が経過し、モダニズムの波が相当に伝播しており、そのこともあって装飾過剰に陥らず、ささやかな意匠になったものと想像される。さて背面側の形をみると、全体が切妻屋根のなかで、半円筒形の祭壇が突出し、聖堂らしさを演出する。筆者が半世紀近くなじんできた景観であり、芦屋川沿いの原風景となりつつある。

聖堂内部をみると、緩やかな扁平ヴォールト天井のもと、三層分吹抜となった空間がひろがる。聖堂内部の最高高さは30尺(9.09m)あり、ヴォールトの形の梁が柱の上から架け渡される。内部でも装飾は限定されて用いられる。1つはロマネスク風の柱頭飾りで草と蔓からなる図案で、もう1つは半円形の祭壇の手前にあるプロセニウム・アーチの形であり、アーチの迫り元には共に断片化された梁形が突き出され、それを円柱が受けるものとなる。

が採択された理由はこのような地形上の制約があったことが影響したものと推測される。川側道路と土手側道路の地盤の差は10尺(3.03m)あり、川側から入った2スパンだけが地階となる。地階・1階・2階は鉄筋コンクリート造で、小屋組はアングルとフラットバーにより組み立てられた鉄骨ラチス梁となる。屋根は赤茶色の塩焼葺瓦葺きとなる。

外観上の特徴は正面向かって右側(南側)に鐘楼が組み込まれた片塔形となっていたことにある。当初の長谷部によるスケッチでも双塔は計画されてはおらず、塔はやはり片塔だが北側に設置されていた点を変更している。それ以外の聖堂正面の妻壁の意匠はほぼそのまま踏襲されている。外壁は全体に組積造をおもわせるように石積の目地が入る。中央には薔薇窓風の大きな丸窓が穿たれる。開口部の形は尖端が尖ったゴシックアーチと半円アーチの2種類があり、前者は玄関廻りと鐘楼上部の換気ガラリに用いられ、後者は玄関上部の左右、内部の祭壇の左右、両面の側壁にもそれぞれ配される。いずれもが2連セットとなり用いられている。

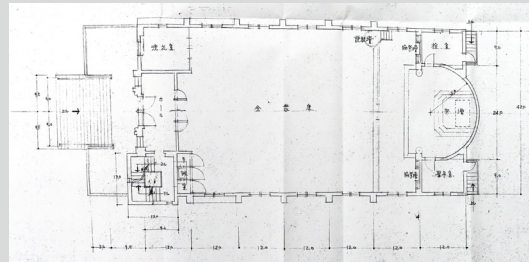
芦屋カトリック教会・外観(川島智生撮影)



聖堂の大きさは桁行が84尺(25.45m)、梁間は42尺(12.7m)となる。桁行の詳細をみると、会衆席60尺、祭壇12尺(3.64m)、玄関ホール12尺となる。この大きさは前述した『建築設計図範例全集』(第4巻)のなかのカトリック教会の大きさと、梁間を除くと、ほぼ共通する。ここでは鉄筋コンクリート造となったことで、梁間が広げられたものとおもわれる。柱は12尺ピッチで入り、柱型は外壁面と室内型の2方向に突出した形状となる。ここでは祭壇は古典的な半円形のアプスとなり、その半径は12尺となる。玄関ホール向かって右側には2階の聖歌隊席ならびに鐘楼にあがる階段があり、左側は洗礼室となる。



芦屋カトリック教会・内部(川島智生撮影)



芦屋カトリック教会・平面図

結

以上考察してきた夙川・住吉(最初の聖堂)・住吉(2回目の聖堂)・尼崎・芦屋の5つの聖堂の建築面を比較し、特徴と共通点を見る。

1)建築スタイルは西洋歴史様式、和風スタイル、モダニズムの3形式がみられる。夙川・尼崎・芦屋の3教会が西洋歴史様式、最初の住吉教会が和風スタイル、戦後の住吉教会がモダニズムといえる。とりわけ夙川教会はゴシック色が濃厚となる。教会らしさという点では西洋歴史様式がふさわしく、和風は対極となる。和風の採択はその場所の風致や景観、時代の風潮による影響があった。

2)建築構造は鉄筋コンクリート造か木造かで分けられ、夙川と芦屋は鉄筋コンクリート造、尼崎・最初の住吉教会・2回目の住吉教会は木造となる。尼崎と2回目の住吉教会は木骨モルタル塗となり、最初の住吉教会は真壁造となる。

2

既にある地域資源と、どう付き合うか。どこにいても同じような物や情報が手に入りやすくなった一方で、それらを効率的に選び続けた結果、街の風景はどんどん均質化していった。その場所でなくても成立してしまう建築や空間が、借り物のように佇む光景を、私たちは幾度となく目にしてきただろう。建築士事務所が足元にある地域資源に今一度目を向けたとき、街はどのように変わっていくだろうか。当たり前そこにありながら、使われずにきたものと向き合う。その実践の先に、立ち上がってくる景色とは。

p.25~ 兵庫県林務課 | 森と都市の関係を編み直す建築士事務所

p.30~ 福岡建築事務所 | 風景と時間に寄り添う公共建築

3)設計者という観点からは戦前・戦後で大きく異なり、戦前までは高等教育を受けた建築家が設計に関与しておらず、外観スタイルや内部意匠をデザイナーが設計していた。つまり構造技術の専門家は別にいた。一方戦後は長谷部鋭吉や東畑謙三という正式な建築家に設計はゆだねられる。

4)寿命に関しては、鉄筋コンクリート造のものは建設されてから一度も建て替えられずに現存するが、木造のものは空襲で焼失している。ただし2回目の住吉教会は木造ながらも、震災に耐えた。

図面ならびに「撮影川島智生」と記されていない写真はすべて、各教会が所蔵。

謝辞

住吉カトリック教会の酒井弘之代表、尼崎カトリック教会の栗山聡子氏、カトリック芦屋教会の川邨裕明主任司祭、安井建築設計事務所の佐野吉彦社長、園部カトリック教会の岡真智子氏、の各位には史料提供などで御協力を得ました。奈良カトリック教会の柳本昭司祭にはカトリック教会独自の建築特性などの御教示をいただきました。紙面を借りて謝意を表します。

